

Title	東北における古墳の変形
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.34(292)- 34(292)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	余白録 史学科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東北における古墳の變形

清水 潤 三

藤田亮策先生を憶うにつけて思い出されるのは眞野古墳群（福島縣鹿島町所在）のことである。本誌二二卷三號に先生が報告されているように、一時に十六基の多數を發掘したのも特例であつたが、同時に内部構造に變化の多いことが、わたくしをいたく刺戟した。はじめて發掘にお伴して、嚴しい指導を受けた半月あまりの間に、先生の人となり傾倒してゆくと同時に、この事實が腦裡に焼きついて今に離れない。内部構造の多様性が果して編年的にのみ取扱わるべきものか否か、なお解決し得ないで摸索を續けているからである。ただ、その中の二三の点については、その後の考古學の進展に伴つて興味ある事實が加えられている。

まず一九四七年末の調査で、われわれは二基の前方後圓墳を發掘したが、後圓部の大部分と、前方部の中央を掘り盡したにも拘らず、ついに得るところなく止んだ。ところが、四九年正月後藤守一、梅宮茂兩氏の手によつて、第二〇號墳のクビレ部

から川原石積の礫柳が發見され、次いで同年夏わたくしと江坂君の再調査により、第二四號墳のクビレ部に立派な横穴式石室が出現し、前方後圓墳における石室の位置としては、正に異例のことで、驚きを新たにした。ところが、その後同じような位置に内部主體を持つ前方後圓墳が九十九里沿岸に存在する事實が、輕部慈恩氏の調査によつて明らかにされて來たのである。

これらの事實について詳論の暇はないが、埋葬主體をクビレ部に置くことは、前方後圓墳の本來の意義が忘れられ、圓墳と同じ取扱いを受けた結果であることは疑いない。それが關東の東部海岸地帯にはじまり、同じ太平洋岸を北上した相馬地方に及んだらしいことは幾多の示唆に富むといえよう。今後中間乃至は隣接地帯に、更に例を増す可能性があると思う。

また眞野古墳群で三百番臺の假番號をつけた四基の古墳は一端に大石を立て、左右兩壁を塊石で積んだ、横穴式石室に通有の積み方をしながら、しかも羨道を缺く、特殊な豎穴式石室を有した。これも一種の變形化と見るべきで、この方は遠く岩手縣北上市の猫谷地古墳群に相似た例が知られている。

要するに關東地方から古墳の變形化がはじまり、東北地方においては、更に著るしく變貌をとげることは、他にも幾多の例證があつて否定しがたいが、その研究を進めることは、蝦夷の種族論とも關聯して、今後の重要な課題となるであろう。